

一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書XV

鳥取県東伯郡琴浦町

UME DA KAYA UNE
梅田萱峯遺跡1

2006

鳥取県埋蔵文化財センター
国土交通省 倉吉河川国道事務所



1 梅田萱峯遺跡1～3区調査前遠景（南から）



2 梅田萱峯遺跡1区調査後遠景（西から）



1 S13炭化材出土状況（北から）



2 S13炭化材出土状況および土層断面（北西から）



1 S13炭化材出土状況（南から）



2 S13炭化材出土状況（北から）



3 S13-P5炭化材出土状況（北東から）



4 S11-P2遺物出土状況（北から）



1 S16炭化材および遺物出土状況（北から）



2 S16壁面付近炭化材出土状況（西から）



1 S16西側土層断面および炭化材出土状況（南から）



2 S16床面遺物出土状況（南東から）



1 S16南東側土層断面および床面遺物出土状況（南西から）



2 S16炭化材および床面遺物出土状況（北西から）



1 S14磨製石剣(S18)出土状況(東から)



2 SX8・11出土遺物



1 SX1・2・7～9・15出土遺物

序

一般国道9号東伯中山道路の改築に伴う発掘調査は、平成14年度から行われ、平成17年度末時点で遺跡数は23遺跡、調査面積は延べ18万平方メートルに及んでいます。

この発掘調査は、平成17年度から鳥取県直営の事業となり、鳥取県埋蔵文化財センターが担当することとなりました。

そのうち、琴浦町にある梅田萱峯遺跡では、弥生時代の集落跡など、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。遺跡の営まれた丘陵上に立つと、弥生人も見ていたであろう日本海を臨むことができます。本書はその調査結果を報告書としてまとめたものです。

この報告書が、郷土の歴史を解き明かす一助となり、埋蔵文化財が郷土の誇りとなることを期待しております。

埋蔵文化財センターでは発掘調査により明らかとなった遺跡や出土品を活用し、その普及啓発に努めることも重要な業務としております。梅田萱峯遺跡についても、現地説明会を開催したほか、県内のショッピングセンターや道の駅で出土品の展示公開を行い、多くの方々にその素晴らしさを実感していただきました。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成19年1月

鳥取県埋蔵文化財センター
所長 久保 穰二郎

序 文

一般国道9号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約691kmの幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡湯梨浜町から米子市（鳥取一島根県境）までの76.6kmを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

東伯中山道路は、東伯郡琴浦町から西伯郡大山町にかけての、国道9号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保、などを目的として計画された一般国道9号（自動車専用道路）であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第94条の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成17年度は、「梅田萱峯遺跡」、「筥津乳母ヶ谷第2遺跡」、「南原千軒遺跡」の3遺跡について鳥取県教育委員会と発掘調査の委託契約を締結し、鳥取県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われました。

本書は、上記の「梅田萱峯遺跡1区」の調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いと存じます。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた鳥取県教育委員会の関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成19年1月

国土交通省 倉吉河川国道事務所
所 長 嘉本 昭夫

例 言

1. 本報告書は、国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所の委託により、鳥取県埋蔵文化財センターが、一般国道9号（東伯中山道路）の改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として、平成17年度に行った梅田萱峯遺跡1区の発掘調査報告書である。
2. 本報告書に記載した遺跡の所在地および調査面積は以下のとおりである。
うめだかやうせ
梅田萱峯遺跡1区：東伯郡琴浦町大字梅田字萱峯395-6 ほか 調査面積5,250㎡
3. 本報告書で示す標高は、3級基準点H10-3-16を基準とする標高値を使用した。方位は公共座標北を示す。なお、X、Yの数值は世界測地形に準拠した公共座標第V系の座標値である。
4. 本報告書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/50,000地形図「赤碕」「伯耆浦安」、琴浦町（旧赤碕町）発行の「赤碕町都市計画図1」を使用した。
5. 本調査にあたり、焼失住居に係る指導を鳥取環境大学教授 浅川滋男氏に、出土石器の石材鑑定を鳥取大学名誉教授 赤木三郎氏にそれぞれお願いした。明記して深謝いたします。
6. 本報告にあたり、調査前・調査後航空写真撮影、調査前地形測量、調査後地形測量、出土炭化材等の¹⁴C年代測定、樹種同定、種実同定、石材産地同定、一部の石器の実測・浄書を業者委託した。
7. 本報告書に掲載した遺物の実測・浄書は、業者委託した分を除き、埋蔵文化財センターおよび調査第一係（東伯調査事務所）で行った。
8. 本報告書でを使用した遺構・遺物写真は文化財事務が撮影した。
9. 本報告書の執筆・編集は高尾浩司、浅田康行が分担し、目次および各文末に文責を記した。
10. 発掘調査によって作成された図面・写真などの記録類、出土遺物は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。
11. 現地調査および報告書作成にあたっては、下記の方々・機関に御指導・御協力いただいた。記して深謝します。（敬称略・五十音順）
琴浦町教育委員会、高田健一

凡 例

1. 遺物の註記における遺跡名には「ウメ1」を略号として用いた。
2. 本報告書で用いた遺構の略号は以下の通りである。
SI：竪穴住居跡 SS：段状遺構 SK：土坑 SX：木棺墓・土坑墓 P：柱穴・ピット
3. 遺構図・遺物実測図の縮尺については、特に説明がない限り以下の通りである。
竪穴住居跡・段状遺構：1/60、土坑・木棺墓・土坑墓：1/40、土器・土製品：1/4、石器：1/2・2/3・1/4、鉄製品：1/2
4. 遺構図・遺物図にもちいたトーンおよび記号は、特に説明がない限り以下の通りである。また、遺物実測図の断面は須恵器を黒塗り、鉄器をトーンとし、それ以外のものは白抜きで示した。
■：地山 □：貼床 ▨：焼土面 ■：炭屑 ▨：赤彩
S：石器・石製品 F：鉄器 ●：土器・土製品 ○：石器 ▲：鉄器
5. 法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。
6. 発掘調査時における遺構名・番号と報告書記載時の遺構名・番号を、一部について変更したものがあつた。新旧の対照表は第3章第1節に示した。
7. 本書における土層名称・土器色調は、基本的には『新版 標準土色帖』による。
8. 本報告書における遺構・遺物の時期決定には下記文献を参考にした。
濱田竜彦 2001「鳥取県・西伯耆地域（阿弥陀川以西）」西伯耆弥生集落検討会『第3回西伯耆弥生集落検討会 山陰における弥生時代前期の地域相—資料集—』
清水真一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』
正岡陸夫・松本岩雄編 木耳社
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
小口英一郎・北島大輔・原あづさ 2004「八橋第8・9遺跡における6～7世紀の土器編年」小口英一郎編『八橋第8・9遺跡』鳥取県教育文化財団報告書87

目 次

巻頭図版

序

序 文

例 言

凡 例

第1章 調査の経過

- 第1節 調査に至る経緯…………… (高尾) 1
- 第2節 調査の方法と経過…………… (高尾) 2
 - (1) 調査区の名称と調査方法
 - (2) 調査の経過
- 第3節 調査体制…………… (高尾) 4

第2章 遺跡の立地と環境

- 第1節 地理的環境…………… (湯村・浅田) 5
- 第2節 歴史的環境…………… (湯村・浅田) 5

第3章 調査の方法と成果

- 第1節 遺跡の立地と層序…………… (高尾) 9
- 第2節 遺構の調査
 - (1) 概要…………… (高尾) 13
 - (2) 竪穴住居…………… (高尾・浅田) 13
 - (3) 段状遺構…………… (浅田・高尾) 48
 - (4) 土坑…………… (高尾・浅田) 51
 - (5) 木棺墓・土坑墓…………… (高尾・浅田) 96
 - (6) 土器溜り・ピット…………… (高尾・浅田) 112
- 第3節 遺物包含層の調査
 - (1) 概要…………… (高尾) 115
 - (2) 包含層出土遺物…………… (高尾) 118

第4章 自然科学分析の成果

- 第1節 梅田堂峯遺跡1区の自然科学分析…………… (バリノ・サーヴェイ株式会社) 136
- 第2節 梅田堂峯遺跡出土黒曜石の産地推定…………… (株式会社古環境研究所) 146
- 第3節 梅田堂峯遺跡出土サヌカイトの産地推定…………… (株式会社古環境研究所) 152
- 第4節 梅田堂峯遺跡1区における炭化種実同定…………… (株式会社古環境研究所) 155

第5章 総 括

- 第1節 弥生時代中期後葉の土器群について…………… (高尾) 158
- 第2節 梅田堂峯遺跡1区における集落内構成 (小型竪穴と貯蔵穴について) …… (浅田) 164
- 第3節 墓群の形成・展開からみた集落の変遷と構造…………… (高尾) 169
- 第4節 まとめ…………… (高尾・浅田) 171

巻末写真図版

抄録

挿図目次

第1図	琴浦町内一般国道9号(東伯中山道路 関連遺跡位置図)……………1	第38図	SS1……………46
第2図	調査区位置図……………2	第39図	SS1出土遺物1)……………47
第3図	琴浦町位置図……………5	第40図	SS1出土遺物2)……………48
第4図	琴浦町主要遺跡位置図……………8	第41図	SS2および出土遺物……………49
第5図	調査前地形測量図……………9	第42図	SK1・2……………51
第6図	調査区基本層序(尾根部)……………10	第43図	SK3および出土遺物……………52
第7図	遺構全体図……………11～12	第44図	SK3出土遺物……………53
第8図	SI1……………14	第45図	SK4・15およびSK4出土遺物……………54
第9図	SI1出土遺物1)……………15	第46図	SK15出土遺物……………55
第10図	SI1出土遺物2)……………16	第47図	SK5および出土遺物……………56
第11図	SI2……………18	第48図	SK6……………57
第12図	SI2出土遺物……………18	第49図	SK6出土遺物……………58
第13図	SI3(1)……………19	第50図	SK7・8……………59
第14図	SI3出土遺物……………20	第51図	SK8出土遺物……………60
第15図	SI3(2)……………21～22	第52図	SK9・P20および出土遺物……………60
第16図	SI4(1)……………23	第53図	SK10および出土遺物……………61
第17図	SI4(2)……………24	第54図	SK11……………61
第18図	SI4出土遺物1)……………25	第55図	SK12……………62
第19図	SI4出土遺物2)……………26	第56図	SK13……………62
第20図	SI5(1)……………27	第57図	SK13出土遺物……………63
第21図	SI5(2)……………28	第58図	SK14および出土遺物……………63
第22図	SI5出土遺物1)……………29	第59図	SK16……………64
第23図	SI5出土遺物2)……………30	第60図	SK16出土遺物……………65
第24図	SI6(1)……………31～32	第61図	SK17および出土遺物……………66
第25図	SI6(2)……………33	第62図	SK18および出土遺物……………67
第26図	SI6(3)……………34	第63図	SK19および出土遺物……………68
第27図	SI6出土遺物1)……………35	第64図	SK20および出土遺物……………69
第28図	SI6出土遺物2)……………36	第65図	SK21……………70
第29図	SI7……………37	第66図	SK22……………70
第30図	SI7出土遺物……………38	第67図	SK22出土遺物……………70
第31図	SI8(1)……………39	第68図	SK23および出土遺物……………71
第32図	SI8(2)……………40	第69図	SK24……………71
第33図	SI8出土遺物……………41	第70図	SK25・26……………72
第34図	SI9……………42	第71図	SK27……………72
第35図	SI9出土遺物……………43	第72図	SK28および出土遺物……………73
第36図	SI10……………44	第73図	SK29……………74
第37図	SI10出土遺物……………45	第74図	SK30および出土遺物……………75
		第75図	SK31および出土遺物……………76

第76図	SK32	77	第115図	P11・119	113
第77図	SK33	77	第116図	P89～92	113
第78図	SK33出土遺物	78	第117図	P56	114
第79図	SK34および出土遺物	79	第118図	P11・56・92・119出土遺物	114
第80図	SK35および出土遺物	80	第119図	谷部土層断面図	116
第81図	SK36および出土遺物	81	第120図	谷部褐色土 遺構・遺物分布図	117
第82図	SK37および出土遺物	81	第121図	土器溜り2・3および出土遺物	118
第83図	SK38・39・40	82	第122図	包含層出土遺物①(谷部・褐色土)	120
第84図	SK41	83	第123図	包含層出土遺物②(谷部・黒褐色～ 暗褐色土)	121
第85図	SK42	83	第124図	包含層出土遺物③	122
第86図	SK41・42切合模式図	83	第125図	包含層出土遺物④	123
第87図	SK41・42出土遺物	84	第126図	包含層出土遺物⑤	124
第88図	SK43および出土遺物	85	第127図	包含層出土遺物⑥	125
第89図	SK44	86	第128図	包含層出土遺物⑦	126
第90図	SK44出土遺物	87	第129図	包含層出土遺物⑧	127
第91図	SK45および出土遺物	88	第130図	梅田荳峯遺跡出土黒曜石 判別図①	148
第92図	SK46および出土遺物	89	第131図	梅田荳峯遺跡出土黒曜石 判別図②	149
第93図	SK47および出土遺物	89	第132図	黒曜石産地位置図	151
第94図	SK48・49	90	第133図	梅田荳峯遺跡出土サヌカイト 判別図①	154
第95図	SK50および出土遺物	91	第134図	梅田荳峯遺跡出土サヌカイト 判別図②	154
第96図	SK51および出土遺物	92	第135図	弥生中期後葉(IV-1)の土器群	162
第97図	SK52および模式図	93	第136図	小型堅穴・貯蔵穴配置図	168
第98図	SK53および出土遺物	94	第137図	木棺墓・土坑墓(南群)の配置と構成	170
第99図	SK54および出土遺物	94			
第100図	調査区南側木棺墓・土坑墓群全体図	97			
第101図	SX1および出土遺物	98			
第102図	SX2および出土遺物	98			
第103図	SX3	99			
第104図	SX4・5および出土遺物	100			
第105図	SX7および出土遺物	101			
第106図	SX10～12および出土遺物	102			
第107図	SX6・8・9標石および周辺雑群 出土状況	105～106			
第108図	SX6・8・9切合関係模式図	107			
第109図	SX8および出土遺物	107			
第110図	SX6・9および出土遺物	108			
第111図	SX13・14	109			
第112図	SX15および出土遺物	110			
第113図	土器溜り1	112			
第114図	土器溜り1出土遺物	112			

挿表目次

表1 新旧遺構対照表	10	表20 出土土器観察表(7)	133
表2 SI1ピット一覧表	17	表21 出土土器観察表(1)	134
表3 SI3ピット一覧表	19	表22 出土土器観察表(2)	135
表4 SI3樹種同定結果	22	表23 出土鉄器観察表	135
表5 SI4ピット一覧表	26	表24 梅田堂峯遺跡1区の放射性炭素年代測定結果	137
表6 SI5ピット一覧表	28	表25 梅田堂峯遺跡1区の暦年較正結果	137
表7 SI6樹種同定結果	32	表26 梅田堂峯遺跡1区の樹種同定結果	139
表8 SI6ピット一覧表	36	表27 梅田堂峯遺跡1区の植物珪酸体分析結果	141
表9 SI8樹種同定結果	40	表28 梅田堂峯遺跡出土黒曜石製石器産地推定結果	147
表10 SI8ピット一覧表	40	表29 産地原石判別群(SEIKO SEA-2110L 蛍光X線分析装置による)	150
表11 SI9ピット一覧表	43	表30 原石採地と試料数	152
表12 SI10ピット一覧表	44	表31 分析対象試料及び推定結果一覧	153
表13 SS1ピット一覧表	48	表32 梅田堂峯遺跡における炭化種実同定結果	156
表14 出土土器観察表(1)	127	表33 各型式共伴関係	161
表15 出土土器観察表(2)	128		
表16 出土土器観察表(3)	129		
表17 出土土器観察表(4)	130		
表18 出土土器観察表(5)	131		
表19 出土土器観察表(6)	132		

文中写真目次

写真1 表土剥ぎ作業風景	3	写真10 SK30出土礫・石器	75
写真2 現地説明会風景	3	写真11 SK44完掘状況(南東から)	87
写真3 SI3炭化材出土状況(西から)	22	写真12 P56遺物出土状況(北西から)	114
写真4 SI3-P5炭化材出土状況(東から)	22	写真13 梅田堂峯遺跡1区の炭化材(1)	143
写真5 SI6垂木痕跡検出状況(西から)	32	写真14 梅田堂峯遺跡1区の炭化材(2)	144
写真6 SK6出土糞94	56	写真15 梅田堂峯遺跡1区の炭化材(3)・植物珪酸体	145
写真7 SK8炭化物層・遺物出土状況(北東から)	58	写真16 梅田堂峯遺跡の炭化種実	157
写真8 SK16・33・36・53出土礫・石器	65		
写真9 SK22糞122出土状況(東から)	69		

巻頭図版目次

巻頭図版1	1	梅田堂峯遺跡1～3区 調査前遠景(南から)	巻頭図版4	1	SI6炭化材および遺物 出土状況(北から)
	2	梅田堂峯遺跡1区調査後遠景 (西から)	2	SI6壁面付近炭化材 出土状況(西から)	
巻頭図版2	1	SI3炭化材出土状況 (北から)	巻頭図版5	1	SI6西側土層断面および炭化材 出土状況(南から)
	2	SI3炭化材出土状況および 土層断面(北西から)	2	SI6床面遺物出土状況 (南東から)	
巻頭図版3	1	SI3炭化材出土状況 (南から)	巻頭図版6	1	SI6南東側土層断面および床 面遺物出土状況(南西から)
	2	SI3炭化材出土状況 (北から)	2	SI6炭化材および床面遺物 出土状況(北西から)	
	3	SI3-P5炭化材出土状況 (北東から)	巻頭図版7	1	SI4磨製石剣(SI8)出土状況 (東から)
	4	SS1-P2遺物出土状況 (北から)	2	SX8・11出土遺物	
			巻頭図版8	1	SX1・2・7～9・15 出土遺物

写真図版目次

PL. 1	1	調査区全景(東から)			
	2	調査区北側完掘状況			
PL. 2	1	SI1完掘状況(南東から)			
	2	高坏7出土状況(北から)			
	3	甕4出土状況(北西から)			
	4	甕1出土状況(北東から)			
	5	磨石S8・凹石S9出土状況(北西から)			
PL. 3	1	SI2完掘状況(北から)			
	2	SI3完掘状況(北東から)			
PL. 4	1	SI4完掘状況(北から)			
	2	SI4遺物出土状況(北から)			
PL. 5	1	SI4甕21出土状況(南東から)			
	2	SI4-P2遺物出土状況(南から)			
	3	SI5磨製石斧S26出土状況(西から)			
	4	SI5剥片S21出土状況(北から)			
	5	SI5-P2遺物出土状況(北東から)			
	6	SI5-P3遺物出土状況(北から)			
PL. 6	1	SI5完掘状況(北から)			
	2	SI5遺物出土状況(西から)			
PL. 7	1	SI6完掘状況(北から)			
	2	SI6南側土層断面(西から)			
	3	SI6茅出土状況(南西から)			
	4	SI6垂木・茅出土状況(南から)			
PL. 8	1	SI7完掘状況(東から)			
	2	SI8遺物出土状況(西から)			
PL. 9	1	SI8完掘状況(西から)			
	2	SI8炭化材および焼土出土状況(東から)			
	3	SI8磨製石斧S45出土状況(北から)			
	4	SI8-P3土層断面(南から)			
PL. 10	1	SI9完掘状況(北から)			
	2	SI9遺物出土状況(北から)			
PL. 11	1	SI9高坏68出土状況(南西から)			
	2	SI9甕66出土状況(南西から)			
	3	SI10完掘状況(北西から)			
PL. 12	1	SK1炭屑検出状況(北から)			
	2	SK2完掘状況(北から)			
	3	SK3遺物出土状況(北東から)			
PL. 13	1	SK3完掘状況(北東から)			
	2	SK4完掘状況(南東から)			
	3	SK5完掘状況(南東から)			
	4	SK6炭屑検出状況(北東から)			
	5	SK6炭化材出土状況(北東から)			
	6	SK6甕95出土状況(北から)			
PL. 14	1	SK6完掘状況(南から)			
	2	SK6甕94出土状況(南から)			
PL. 15	1	SK7完掘状況(北西から)			
	2	SK8完掘状況(北東から)			
	3	SK9焼成粘土塊検出状況(東から)			
	4	SK10完掘状況(南から)			
	5	SK11完掘状況(北から)			
	6	SK12完掘状況(南西から)			
PL. 16	1	SK13西側土層断面(北西から)			
	2	SK13遺物出土状況(西から)			
	3	SK13完掘状況(北西から)			
PL. 17	1	SK14遺物出土状況(北西から)			
	2	SK15甕92出土状況(西から)			
	3	SK17完掘状況(西から)			
	4	SK18完掘状況(西から)			
	5	SK19完掘状況(北西から)			
	6	SK23・24完掘状況(北から)			
PL. 18	1	SK16遺物出土状況(東から)			
	2	SK16完掘状況(南から)			
PL. 19	1	SK22遺物出土状況(南から)			
	2	SK20完掘状況(東から)			
	3	SK28完掘状況(西から)			
PL. 20	1	SK26完掘状況(東から)			
	2	SK29完掘状況(南東から)			
	3	SK30完掘状況(北東から)			
	4	SK30-P2礎出土状況(南東から)			
	5	SK31遺物出土状況(北から)			
	6	SK31完掘状況(北から)			
PL. 21	1	SK27完掘状況(北から)			
	2	SK32完掘状況(北から)			
	3	SK33土層断面(西から)			
	4	SK33完掘状況(西から)			
	5	SK35遺物出土状況(東から)			
	6	SK35床面遺物出土状況(南から)			
PL. 22	1	SK34遺物出土状況(東から)			
	2	SK34完掘状況(西から)			
	3	SK35完掘状況(北東から)			
PL. 23	1	SK36遺物出土状況(西から)			
	2	SK37完掘状況(北から)			
	3	SK38完掘状況(南東から)			
	4	SK39完掘状況(南西から)			
	5	SK41遺物出土状況(北から)			
	6	SK41完掘状況(北から)			
PL. 24	1	SK40完掘状況(北から)			
	2	SK42完掘状況(北東から)			
	3	SK43完掘状況(東から)			
	4	SK45土層断面(西から)			
	5	SK46遺物出土状況(北西から)			
	6	SK46完掘状況(北西から)			
PL. 25	1	SK44遺物出土状況(南東から)			
	2	SK47完掘状況(西から)			
	3	SK48完掘状況(南西から)			
PL. 26	1	SK50遺物出土状況(北から)			
	2	SK50土層断面(北から)			
PL. 27	1	SK49完掘状況(北西から)			
	2	SK50完掘状況(北から)			
	3	SK51完掘状況(東から)			
	4	SK52完掘状況(北から)			

	5	SK53遺物出土状況(東から)	PL. 44	1	SI5出土土器
	6	SK54完掘状況(南東から)	PL. 45	1	SI5出土土器
PL. 28	1	SS1完掘状況(西から)		2	SI6出土土器
	2	SS1磨製石斧S49出土状況(北から)		3	SI6出土土器
	3	SS1壺74出土状況(南東から)	PL. 46	1	SI6出土土器
	4	SS1床面遺物出土状況(北東から)		2	SI9出土土器
	5	SS1床面遺物出土状況(北東から)		3	SI9出土土器
PL. 29	1	SX1完掘状況(北東から)		4	SI10出土土器
	2	SX1標石および土層断面(南東から)	PL. 47	1	SI2・8出土被熱粘土塊
	3	SX1土層断面(南東から)		2	SS1・2出土土器
	4	SX2完掘状況(南東から)		3	SS1出土土器
	5	SX2標石および土層断面(南西から)	PL. 48	1	SI9・10、SSI・2、SK5・8～10・13・14 出土土器
	6	SX2土層断面(北東から)			
PL. 30	1	SX3完掘状況(東から)	PL. 49	1	SK16・19・20・22出土土器
	2	SX3標石・配石検出状況(東から)	PL. 50	1	SK3出土土器
	3	SX3土層断面(北から)		2	SK4・15出土土器
	4	SX3土層断面(東から)		3	SK6出土土器
	5	SX4完掘状況(南東から)	PL. 51	1	SK6出土土器
PL. 31	1	SX11・15標石検出状況(北から)		2	SK13出土土器
	2	SX15標石検出状況(南東から)		3	SK13出土土器
PL. 32	1	SX15土層断面(北から)		4	SK16出土土器
	2	SX15完掘状況(南から)		5	SK17出土土器
PL. 33	1	SX7完掘状況(西から)	PL. 52	1	SK22出土土器
	2	SX7土層断面(南東から)		2	SK31出土土器
	3	SX5完掘状況(北西から)		3	SK34出土土器
	4	SX10検出状況(北東から)		4	SK35出土土器
	5	SX10完掘状況(北東から)	PL. 53	1	SK42出土土器
PL. 34	1	SX6・8・9標石および礫群検出状況 (北西から)		2	SK41出土土器
	2	SX8標石検出状況(南東から)	PL. 54	1	SK28・31・33～37、SX5出土土器
PL. 35	1	SX6・8・9検出状況(北から)	PL. 55	1	SK50・51・53・54、P11・89・92・119 出土土器
	2	SX8器台187出土状況(北から)			
	3	SX8土層断面(東から)	PL. 56	1	SK45出土土器
	4	SX6・9標石検出状況(東から)		2	SK50出土土器
	5	SX6・9土層断面(東から)		3	SX8出土土器
PL. 36	1	SX6・8・9完掘状況(北から)		4	SX11出土土器
	2	SX11完掘状況(北西から)	PL. 57	1	土器溜り1出土土器
	3	SX12完掘状況(北西から)		2	P56出土土器
PL. 37	1	SX13土層断面(南東から)		3	土器溜り2・3出土土器
	2	SX13完掘状況(南東から)	PL. 58	1	包含層出土土器(1)
	3	SX14完掘状況(北東から)		2	包含層出土土器(2)
PL. 38	1	谷部集石検出状況(北から)		3	SK9出土被熱粘土塊
	2	谷部土器溜り2検出状況(北東から)		4	包含層出土石鏃
	3	谷部土器溜り3検出状況(北東から)	PL. 59	1	SX15、谷部包含層出土土器
PL. 39	1	谷部第二遺構面完掘状況 (南東から)	PL. 60	1	竪穴住居出土土器
	2	谷部土層断面		2	SS1・2、P56出土土器
PL. 40	1	SI1出土土器	PL. 61	1	土坑出土土器
	2	SI2出土土器		2	遺構内出土剥片石器
	3	SI4出土土器	PL. 62	1	包含層出土剥片石器
PL. 41	1	SI1・3・7・8出土土器		2	包含層出土土器
PL. 42	1	SI4出土土器		3	SX6・9・10標石内石器
PL. 43	1	SI4出土土器		3	SK45、包含層出土鉄器
	2	SI5出土土器		4	鉄器X線写真

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

山陰地方では、東西に貫く国道9号線の交通混雑緩和と将来の国土幹線道路の整備を目的として山陰自動車道の整備事業が進められている。鳥取県中部地域では東伯中山道路、北条道路、青谷羽合道路が自動車専用の高規格道路として計画・施工され、一部の区間は供用が開始されている。

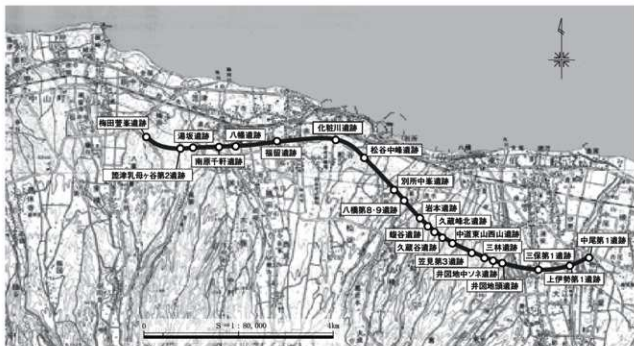
このうち東伯中山道路の計画地内には多数の遺跡があり、建設に先立ち建設地内の遺跡および遺構の広がりを確認する必要性が生じたため、平成11年度から赤碓町教育委員会（現・琴浦町教育委員会）による試掘調査が進められた。試掘調査の結果を受け、平成14年度から16年度にかけて財団法人鳥取県教育文化財団により本格的な発掘調査が行われており、その延べ面積は平成17年度末現在で約180,000㎡となっている（第1図）。

梅田堂家遺跡は平成13・15年度に試掘調査が行われており、1区に該当する尾根北側でも弥生時代中期後葉の竪穴住居跡や土坑墓、供献土器と思われる赤彩器台が検出された。尾根南側では同時期の竪穴住居、掘立柱建物が検出され、集落が尾根の広範にわたって形成されていることが予見されるとともに、当該調査区は墓域としての役割を担っていたと推測された（小泉・石賀2004）。

この結果を受けて、国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所と鳥取県教育委員会が遺跡の取り扱いを協議し、文化財保護法に基づく手続きを経て、鳥取県埋蔵文化財センターが平成17年度の発掘調査を行った。調査面積は5,250㎡である。（高尾）

【参考文献】

- 武尾美則・石賀太編 2002『赤碓町内道路発掘調査報告書Ⅶ』赤碓町教育委員会
 小泉傑・石賀太編 2004『赤碓町内道路発掘調査報告書Ⅸ』赤碓町教育委員会



第1図 琴浦町内一般国道9号（東伯中山道路）関連遺跡位置図

第2節 調査の方法と経過

(1) 調査区の名称と調査方法

梅田萱峯遺跡は南から樹枝状に伸びた丘陵根根上に位置する。梅田萱峯遺跡が位置する根根は中部広域農道によって南北に分断されており、そうした現況地形と試掘調査の結果などから、分断された根根北側を1区、南側を2区、2区と谷を挟んだ東側根根を3区と設定し、平成17年度は1区、3区について調査を行った(第2図)。

1区は根根の先端部にあたり、根根頂部平坦面から東側斜面部、そして調査地北東部に挟入する浅い谷の開口部までの範囲が調査対象となった。遺跡を覆う表土は重機により除去し、表土剥ぎ終了後、調査地内に世界測地系に準拠した公共座標第V系に基づく10m間隔の方眼杭を設置した。1～3区全体が包括されるように、東西(X)軸には北から順に算用数字を、南北(Y)軸には東から順にアルファベットを振り、杭名は交差する軸線のアルファベットと数字を組み合わせたもの(「E10杭」など)とした。この方眼杭によって10m区画のグリッドを設定し、東西南北軸交点の北東側杭の名称をとってグリッド名とした。遺構や遺物包含層などの掘り下げは人力で行い、調査により生じた排土は調査区東側斜面部裾に設置された土留柵までの範囲に集積した。

検出した遺構・遺物の記録には、光波トランシットを用いた。出土遺物のうち、時期判断が可能なものについては出土位置を記録し、それ以外は遺構またはグリッドごと一括して取り上げた。写真撮影は35mm判と6×7判フィルムを併用し、適宜デジタルカメラにより補足した。

(2) 調査の経過

調査に先立ち、調査前航空写真撮影を平成17年4月14日に、基準点測量・調査前地形測量および方眼測量を4月13日から4月27日にかけて業者委託により行った。調査前地形測量が終了した後、4月20日から表土剥ぎを開始し、それと併行して当初ストックヤードに設定されていた谷部に雨水対策としてポリエチレン管を埋設する作業に取りかかった。しかし、掘削直後から多量の土器片が出土するとともにピット等遺構の存在が確認されたことから、管の埋設とは別に、それらの広がりを確認するために谷筋に沿って重機で試掘坑を複数箇所掘削した。その結果、遺構・遺物の広がりは土留柵が打設された谷底付近まで及ぶことが明らかとなった。谷部の取り扱いについては国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所と鳥取県教育委員会が協議し、翌年度以降に改めて調査を行うこととなり、ストックヤードも途中から調査区東側斜面部へ変更した。

5月9日から発掘作業員の稼働を開始し、休憩小屋や調査地への階段設営といった周辺整備を行っ



第2図 調査区位置図

た後、5月13日から人力による包含層の掘り下げおよび遺構検出作業に着手した。調査計画は尾根北側から遺構検出に着手し、順次南へ進めるよう立案した。尾根北側では概して表土が薄く、F4グリッドを中心に人頭大から拳大の礫が露出していた。同様の状況は12ライン以南において顕著であり、試掘調査報告書でも推測されているように礫石を伴う土坑墓群が存在することが予想された。

6月に入り尾根北側から鞍部にかけて遺構検出が進み、SI3・SX1～4などを検出した。特にSX1・2・4などは地山に酷似した褐色系土で埋め戻されており、通常の精査による平面検出は困難をきわめた。礫石および地形の状況を勘案して設定したサブトレンチによって土層断面の所見も補足しながら検出作業を進めた。SI3は調査例の少ない弥生時代中期後葉の焼失住居であり、7月26日に鳥取環境大学の浅川滋男教授に現地指導を依頼した。

8月にはSI4から一括廃棄された土器とともに完形の磨製石剣が出土した。こうした出土例は米子市東宗像遺跡に次ぐもので稀少な例となった。その後包含層の掘り下げと遺構検出が調査区南側におよぶにつれ、多数存在する切り株が作業に大きな支障を与えることとなり、9月下旬に業者に委託して切り株をすべて除去した。調査を進めた結果、弥生時代中期後葉の集落および土坑墓・木棺墓が同一尾根上に展開する遺跡であることが明らかとなり、当該期の住居構造を把握できる焼失住居も2棟検出されるなど重要な成果を得たため、10月22日に現地説明会を開催した。当日は時折みぞれの降る荒天にもかかわらず、約60名の方々に参加いただいた。

10月27日に委託業者による調査地の航空写真撮影を行い、その後も遺構の掘り下げ・測量を続け



写真1 表土剥ぎ作業風景



写真2 現地説明会風景

調査日誌 (抄)

4月13日	調査前地形・基準点測量開始 (業者委託)	8月19日	F12グリッド包含層掘り下げ・遺構検出 人頭大の礫を用いた集石を複数確認
4月14日	調査前空撮 (業者委託)	9月15日	SK30ピット内に埋設された状態で礫が出土
4月20日	重機による表土剥ぎ開始 排土置き場となる谷部で遺構・遺物を確認	9月16日	谷部暗褐色土層より下り開始
4月25日	方眼測量・杭打設開始 (業者委託)	9月16日	遺跡内切り株除去作業 (業者委託)
5月13日	遺構検出開始、SK1検出	9月28日	SI5検出、谷部褐色土上面でピット群を検出
5月24日	SI1・2、SK3～5検出	10月3日	SSI-P2で投棄された礫・大型壺片出土
6月8日	F5・G5グリッド掘り下げ・遺構検出 縄文晩期～弥生前期土器・石環等出土	10月7日	D12グリッド等で礫群検出、SX5・7検出
6月14日	土坑として掘り下げを行っていた遺構で小口溝 を検出、SX1と命名	10月22日	現地説明会開催 (60名参加)
6月20日	SX2掘り下げ・SX3検出	10月27日	航空写真撮影、SI1完了写真撮影
6月21日	SI3検出・サブトレ掘り下げ、焼失住居と判明 SX4検出	11月4日	SM・8・9～11・15標石検出写真撮影 谷部第1遺構面完了写真撮影
7月12日	SK13確認上、被熱痕のある礫を多数確認	11月18日	調査後地形測量 (業者委託)、SI6炭化材取上
7月26日	鳥取環境大学浅川滋男教授来訪、焼失住居に係る 現地指導	11月22日	SM・8・9検出、赤彩部台等出土 谷部第2遺構面完了写真撮影
7月28日	E9～F10グリッド掘り下げ・遺構検出 炭化材片・焼土粒の集中範囲 (SI6) を確認	11月25日	SM10・12・13検出、SI6完了
8月4日	SI4掘り下げ、磨製石剣出土	11月29日	SI10・SX8・11～14完了
		11月30日	SM・9・15・SK4完了 現場機器撤収、要領調査終了

たが、大半の遺構は埋没の過程で廃棄土坑に使用されていたため多量の遺物を伴っており、それらを記録し取上げて完掘に至るまでに多くの時間を要した。調査区南側に分布する木棺墓・土坑墓群の検出と掘り下げは散在する礫石群の記録と撤去作業を行った後、11月下旬からの着手となった。11月30日にはすべての作業を完了し、発掘機材も撤収して現地での調査を終了した。

調査成果は埋蔵文化財センターのホームページで速報的に紹介した。また東伯中山道路関係の発掘調査について紹介する「発掘調査だより」を作成し、5月から琴浦町内の小中学校に毎月配布したり、7月から琴浦町報に遺跡紹介記事を掲載したりするなど、地元への普及啓発活動を行った。

発掘調査報告書作成に伴う遺物の整理作業は、埋蔵文化財センターおよび調査第一係（東伯調査事務所）で行った。 (高尾)

第3節 調査体制

下記の体制で発掘調査・報告書作成を行った。

鳥取県埋蔵文化財センター

所	長	田中	弘道
次	長	戸井	歩（兼総務係長）

総務係

副	主	幹	福田	高之
---	---	---	----	----

発掘事業室

室	長	加藤	隆昭（兼調整係長）
---	---	----	-----------

調整係

文化財主事	八峠	興
-------	----	---

調査第一係

係	長	湯村	功
---	---	----	---

文化財主事	浅田	康行
-------	----	----

文化財主事	高尾	浩司
-------	----	----

(高尾)

第2章 遺跡の立地と環境

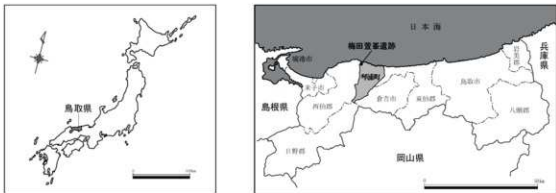
第1節 地理的環境

梅田萱峯遺跡1区が所在する琴浦町は鳥取県中部地域の西端、大山町との町境付近に位置する。平成16年9月1日に東伯町と赤碕町が合併して新町として誕生した。県庁所在地の鳥取市からは西に約60km、県西部の商都米子市からは東に約35km離れている。町域は大山山麓から北に向かって広がる三角形で、東は北栄町、倉吉市と、西は大山町と、南は江府町と、北は日本海と接する。東西15.2km、南北18.5km、総面積は139.88km²を測る。平成17年12月末時点の人口は、20,404人である。

地勢は、大山山麓から派生する急峻な丘陵地が北に向かうほど緩やかとなり、町内を南北に流れる加勢蛇川、洗川、勝田川などの流域に平野部が広がっている。海岸線は単調であるが、良好な漁場となっている。

町の産業は日本海沿岸部と山間部、その中間部にそれぞれ特徴がある。日本海沿岸部は国道9号線沿いを中心に、地酒、地ビール、和牛、乳業、魚肉加工業といった酒造や食品製造などの商工業が盛んである。また海岸部は赤碕港を中心とした沿岸漁場が有名である。中間部は県下有数の生産、販売高を誇る農業が盛んで、二十世紀梨は海外へも輸出されている。山間部は大山滝や南北朝期の動乱を描いた「太平記」の舞台となった船上山、国指定天然記念物の伯耆の大シイなどの風光明媚な自然に囲まれ、多くの観光客が訪れている。

梅田萱峯遺跡1区は町の北西部、旧赤碕町域に位置する。日本海までは直線距離で1.3kmである。大山山麓から北へのびる低丘陵上の先端にあり、標高は約53.4～57.8mを測る。(湯村・淺田)



第3図 琴浦町位置図

第2節 歴史的環境

ここでは琴浦町内および周辺における遺跡の概要を述べる。

旧石器・縄文時代 鳥取県下の旧石器資料は15遺跡で確認されており、位置づけがはっきりしない尖頭器類を含めても40遺跡を数えるに過ぎない。町内では三林遺跡と梅田萱峯遺跡でナイフ形石器の可能性のある資料が、笠見第3遺跡(7)で細石核の可能性のある資料が、本来の位置を遊離した状態で出土している。また水溜、松谷の両地点で槍先形尖頭器が採集されている⁽²⁷⁾。住吉第2遺跡(99)では草創期まで遡る可能性のあるものとして、有舌尖頭器と考えられる石器が出土している。近年、隣接する大山町門前第2遺跡でAT下位から小型ナイフ形石器を主体とするブロックが出土しており、

良好な火山灰堆積が見られる当町域でも、今後層位的な出土例が期待される。

縄文時代については、集落像を明らかにする調査例は少ない。早期のものとしては、赤坂後口山遺跡(93)、退休寺飛渡り遺跡(101)、上伊勢第1遺跡(2)があり、押型文土器が出土している。中期以前では、松ヶ丘遺跡(66)、森藤第1・第2遺跡(37)、井岡地中ソネ遺跡(5)、井岡地頭遺跡(4)などで土器が出土している。後期段階では森藤第2遺跡と南原千軒遺跡(19)で石囲炉をもつ堅穴住居跡が検出されている。森藤第2遺跡では、住居内から土器のほか土器片錘、打ち欠き石錘、土偶が出土している。南原千軒遺跡でも遺構に伴わない土偶が出土しており、今朝平タイプの可能性が考えられている。仮にそうであれば、同タイプの日本海側における分布の西限例となりうる。この他に後期～晩期のものでは大山町御崎第2遺跡(80)、八重第1遺跡(81)、八重第3遺跡(83)、小松谷遺跡(97)、下甲拔堤遺跡(96)がある。

弥生時代 当地域の弥生開始期の様相は明らかではない。前期から中期前半の土器は丘陵上の遺跡で散見されることはあるが、近年の低地部の調査でこの時期の集落の一端が見え始めている。上伊勢第1遺跡(2)では前期の堅穴住居跡が3種確認され、中尾第1遺跡(1)と三保第1遺跡(3)では同時期の配石墓や土坑墓などの墓塚が調査されている。これらの遺跡は加勢蛇川を挟んだ沖積平野内の微高地上に近接して存在している。樋口第1遺跡(86)、三谷遺跡(89)では前期の土器片が出土している。南原千軒遺跡(19)は勝田川沿いの扇状地上に位置し、中期前葉の土器が大量に出土している。また中尾第1遺跡は中期中葉の集落でもある。

中期後半から古墳時代初頭にかけては、丘陵上を舞台として集落が大きく展開する。森藤第1遺跡(37)、水溜り・駕籠据場遺跡、大峰遺跡(38)、井岡地中ソネ遺跡、三保遺跡(49)、笠見第3遺跡、三林遺跡(6)、中道東山西山遺跡(8)、久蔵峰北遺跡(10)、福留遺跡(17)など枚挙に暇がない。中期後葉の集落としては退休寺遺跡(100)があり、堅穴住居をはじめ掘立柱建物跡や木棺墓が確認されている。また、住居内からミニチュア分銅形土製品が出土し、柱を抜き取った柱穴内から甕が出土していることから廃棄時の祭祀的行為が想定されている。八重第1遺跡(81)、八重第3遺跡(83)、住吉第2遺跡では後期、退休寺第1遺跡(102)では後期～終末期の住居跡が確認されている。このように多数の住居跡が調査された例から見ると、後期後半にかけて大山北～東麓に広がる低丘陵上に集落が展開する様子が窺える。

各種生産に関しては、玉作遺跡の調査例が増えている。南原千軒遺跡では中期初頭から後期までの土器を含む溝から施溝分割技法による管玉素材が多数出土している。笠見第3遺跡、久蔵峰北遺跡では後期の玉作工房が検出されている。

墳墓では墓ノ上遺跡(65)、別所女夫岩峯遺跡(61)で中期と推測される木棺墓が見つっている。湯坂遺跡(20)では後期の小型の墳丘墓を増築した例があり、山陰地方では珍しい鉄石英製の管玉が副葬されていた。井岡地中ソネ遺跡では弥生時代終末から古墳時代初頭の区画溝を伴う土坑墓群が検出されている。

町内では銅鐃、銅矛、銅剣が出土している。八橋では扁平鈕1式銅鐃のほか、同一丘陵で銅矛も見つかっている。また田越では円墳の箱式石棺下30cmの位置から中細形銅剣が4本出土している。

古墳時代 町内には4基の前方後円墳がある。別所1号墳(笠塚古墳、53m)(63)、八橋孤塚古墳(町史跡、62m)(60)、大塚古墳(34m)、竜ヶ崎3号墳(21m)(48)で、このうち前期に属すると思われるのは別所1号墳である。

中期から後期にかけては群集墳が築かれる。大高野古墳群 (30)、塚本古墳群 (31)、斎尾古墳群 (32)、公文古墳群 (45)、竜ヶ崎古墳群 (40)、別所古墳群 (64)、筈津古墳群 (75)、坂ノ上古墳群 (74)、梅田古墳群 (73) などである。大高野3号墳では金銅製耳環、青銅製鈴、鉄刀などが副葬されていた。後期以降採用される横穴式石室には、大法3号墳、三保6号墳などのように竪穴系横口石室と呼ばれる構造をもつものがある。槻下古墳群、大高野古墳群、塚本古墳群、斎尾古墳群など後続する石室形態もその系譜に連なるものであることから、加勢蛇川流域に石室形態を同じくする集団が存在したことを示している。終末期に属すると思われる切石積石室は山田1号墳 (町史跡) (46)、出上岩屋古墳 (県史跡) (67) に認められる。

集落の様相は不明な部分が多い。三保遺跡、上伊勢第1遺跡、笠見第3遺跡、蝮谷遺跡 (前期から後期) (11) 三林遺跡、久蔵峰北遺跡 (前期から中期)、中尾第1遺跡、三保第1遺跡、松谷中峰遺跡 (中期) (15)、井岡地中ソネ遺跡 (中期から後期)、別所中峯遺跡 (前期と後期) (14) などがある。また、林ノ峰遺跡 (95)、三谷遺跡は散布地である。集落遺跡の調査例は多いが、実態は必ずしも明らかではない。そのような中で注目されるのは八橋第8・9遺跡である。ここでは6世紀から7世紀代の竪穴住居跡23棟などが調査されたほか、椀形鍛冶滓や流動滓も出土しており、周辺において鉄生産活動が行われていたと考えられる。

古代 町内には山陰地方唯一の国特別史跡である斎尾廃寺がある。金堂や塔、講堂跡が残り、これらを取り囲む土塁状の高まりも存在する。伽藍配置は法隆寺式である。斎尾廃寺が位置する加勢蛇川右岸は伯耆国八橋郡の中心地であったと推定され、近くには出土した炭化米を根拠に正倉または郷倉と考えられる総柱礎石建物群がある大高野遺跡や伊勢野遺跡、水溜り・駕籠据場遺跡といった掘立柱建物群や墨書土器を伴う遺跡がある。やや南には墨書土器や金属器写しの須恵器が出土した森蔭第1・第2遺跡、大法古瓦出土地がある。このほか、旧筈津郷に位置する八幡遺跡では掘立柱建物群や赤色塗彩土器が多数出土している。南原千軒遺跡でも墨書された土師器や須恵器が出土している。

墳墓の関係では、笠見第3遺跡と三林遺跡で火葬墓が見つっている。笠見第3遺跡では土坑を掘り蔵骨器と考えられる土師器坏と火葬骨を木櫃に納めていた。三林遺跡では土坑を掘った中に石柩を設け、その中に土師器を組み合わせた蔵骨器に火葬骨を納めていた。金屋と上法万では経塚が見つっており、金屋では銅経筒が納められていた。

生産関係では、上伊勢第1遺跡で9世紀から13世紀と考えられる畠跡が見つかり、中道東山西山遺跡では9世紀代に位置づけられる鍛冶炉などの鉄関連遺構や遺物が検出されている。

中世 南原千軒遺跡では平安後期の鍛冶関連遺構や遺物が大量に出土した。鉄素材から製品までを生産していたと考えられる。井岡地頭遺跡では平安時代末頃の方形区画溝が検出されている。内部には道路状の硬化面や礎石とおぼしき礎があり、居館跡の可能性もある。槻下館跡 (町史跡) は40m四方の主郭のほか、周囲に土塁や壕を巡らせた郭をもつ複郭式と考えられる。鎌倉時代に岩野弾正の居城であったと伝えられるが詳細は不明である。

町南部には標高615mの船上山がそびえる。ここには南北朝期に後醍醐天皇が隠岐から逃れた行宮跡 (国史跡) がある。赤碕港から船上山にかけては、鎌倉末期と推定される宝塔と宝篋印塔の二様式を合わせもつ独特の形態の赤碕塔 (県保護文化財) が点在する。大山町赤坂集落には、赤坂大五輪塔 (91) がある。元弘3 (1333) 年の船上山合戦の際に、名和軍に加勢したといわれる土豪赤坂掃部助幸清の墓と伝えられる。

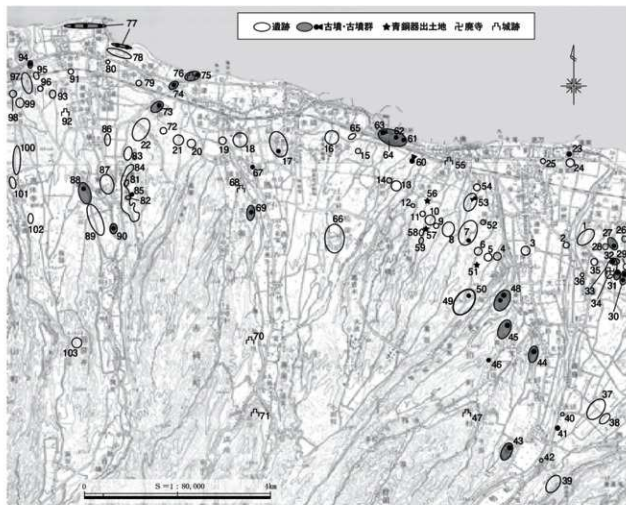
中世城館は町内各地に見られる。南北朝期に西伯善で勢力をもっていた行松氏が築城し、後に毛利氏が支配し伯善の経営拠点となった八橋城跡(町史跡)(55)、天正年間の築城と考えられる妙見山城跡(47)、土塁と堀が残る町史跡の鏡津城(横城)(76)跡のほか、條山城跡(68)、大仏山城跡(70)、山川城跡(71)がある。大山町岩井垣城(92)は、空堀や土塁、石段がよく残る。(湯村・淺田)

(註) 水溜は堰下、松谷は松ヶ丘と呼ばれることもあるが、下記文献に基づき名称を統一した。

根幹麻雄 1991「鳥取県の旧石器研究」『鳥取考古学会誌』第8集

【参考文献】

- 2005 中山町(現大山町)教育委員会「退休寺遺跡・退休寺飛渡り遺跡」
 2002 中山町(現大山町)教育委員会「町内遺跡発掘調査報告書 田中川上遺跡・退休寺飛渡り遺跡」
 1999 中山町(現大山町)教育委員会「住吉第2遺跡」
 1999 中山町(現大山町)教育委員会「御崎第1遺跡・御崎2遺跡」



1. 中塚第1遺跡, 2. 上伊勢第1遺跡, 3. 三保第1遺跡, 4. 井原地跡遺跡, 5. 井原地中ツナ遺跡, 6. 三林遺跡, 7. 笠見第3遺跡, 8. 中道東山西山遺跡, 9. 久廣谷遺跡, 10. 久廣峰之遺跡, 11. 鏡谷遺跡, 12. 岩本遺跡, 13. 八橋第6・9遺跡, 14. 別所中塚遺跡, 15. 松谷中塚遺跡, 16. 化野川遺跡, 17. 種留遺跡, 18. 八幡遺跡, 19. 南原千軒遺跡, 20. 湯野遺跡, 21. 鹿津丸岡ヶ谷第2遺跡, 22. 梅田普重遺跡, 23. 湯原原子塚古墳, 24. 湯原第1遺跡, 25. 湯原第2遺跡, 26. 堰下古塚群遺跡, 27. 堰下古塚群, 28. 下高塚2号遺跡, 29. 大森野遺跡, 30. 大森野古墳群, 31. 赤木古墳群, 32. 倉尾古墳群, 33. 下野第1号遺跡, 34. 倉尾塚, 35. 伊勢野遺跡, 36. 金屋野原, 37. 森第1・2遺跡, 38. 大塚遺跡, 39. 西高塚古墳遺跡, 40. 大谷古瓦出土地, 41. 大法3号墳, 42. 大法方精塚, 43. 杉地古墳群, 44. 下光野古墳群, 45. 公文古墳群, 46. 山田1号墳, 47. 妙見山城跡, 48. 竜ヶ崎古墳群, 49. 三保遺跡, 50. 三保6号墳, 51. 田越剛出土地, 52. 田越第4遺跡, 53. 笠見第2遺跡・笠見1号墳, 54. 笠見第1遺跡, 55. 八橋城跡, 56. 八橋剛出土地, 57. 久敷種樹寺出土地, 58. 八橋第2遺跡, 59. 八橋第4遺跡, 60. 八橋塚古墳, 61. 別所女男前遺跡, 62. 別所2号墳, 63. 別所1号墳(笠取塚古墳), 64. 別所古墳群, 65. 松ノ上遺跡, 66. 松ヶ丘遺跡, 67. 出上岩屋古墳, 68. 棒山城跡, 69. 太一塚古墳群, 70. 田中川上遺跡, 71. 山川城跡, 72. 梅田(栄田)古墳群, 73. 梅田(栄田)古墳群, 74. 松ノ上古墳群, 75. 鹿津古墳群, 76. 鹿津城跡, 77. 御崎古墳群, 78. 御崎第1遺跡, 79. 田中川上遺跡, 80. 御崎第2遺跡, 81. 八重第1遺跡, 82. 八重第2遺跡, 83. 八重第3遺跡, 84. 八重第4遺跡, 85. 岩屋平古墳, 86. 樋口第1遺跡, 87. 樋口第2遺跡, 88. 三谷古墳群, 89. 三谷遺跡, 90. 東原古墳群, 91. 高坂大五輪塚, 92. 岩井垣城跡, 93. 赤坂後山遺跡, 94. 曲松古墳群, 95. 林之峯遺跡, 96. 下平段遺跡, 97. 小松谷遺跡, 98. 住吉第1遺跡, 99. 住吉第2遺跡, 100. 退休寺遺跡, 101. 退休寺飛渡り遺跡, 102. 退休寺第1遺跡

第4図 琴浦町主要遺跡位置図

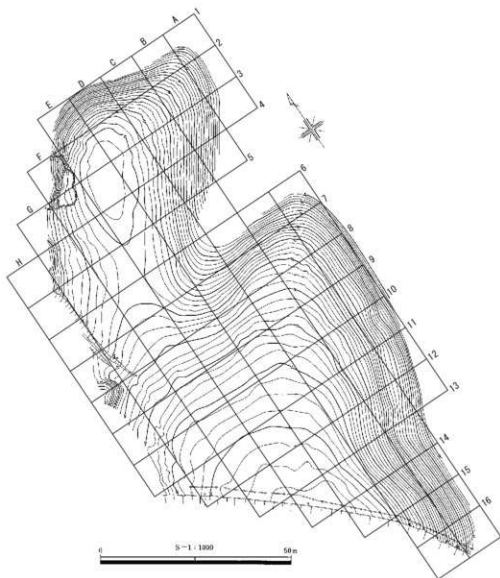
第3章 調査の方法と成果

第1節 遺跡の立地と層序

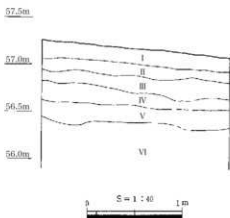
梅田萱峯遺跡は大山北麓から派生する標高約55mの丘陵上に立地する。一帯の丘陵は台地状地形を呈し、浸食作用によって大小の谷が開析されている。

本調査地である1区は北東へ伸びる尾根の先端部に位置し、北東部分に浅い谷が挟入している。尾根を南北に分断する中部広域農道の南側が2区にあたり、2区と埋没谷を挟んだ東側尾根が3区となる。調査前の現況は榎を中心とした植林地であった。しかし、調査前から一部露出した状態で目視できた礎石群の大半が標石として原位置を保っていたことなどを考えれば、当該地は現在に至るまで耕作による攪乱等も含め大幅な地形の改変を受けていないと想定される。

調査は尾根北側から適宜トレンチを掘削して土層の堆積状況を確認しながら進めた。北東側に開口した谷部を除く尾根部の土層堆積状況はほぼ共通しており、調査区内で最高所にあたる南壁面に設定したトレンチで基本層序の記録を行った。以下、各層序を説明する。



第5図 調査前地形測量図



- I. 表土
 II. 暗褐色土 (10YR3/3) 0.3cm以下の炭化物少含、しまり強、粘性強。
 III. 褐色土 (7.5YR4/6) 0.2cm以下の炭化物少含、しまり弱、粘性強。
 IV. 明褐色土 (7.5YR4/6) 5cm以下のホーキブロック多含、しまり弱、粘性強。
 (ホーキ層に相当)
 V. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) しまり強、粘性強。(ホワイトローム)
 VI. 橙褐色土 (5YR6/6~7.5YR6/6~5YR6/8) しまり強、粘性強。(ハードローム)

第6図 調査区基本層序(尾根部)

表1 新旧遺構対照表

報告時遺構名	調査時遺構名
SI10	SK40
SS2	SK58
SK13	SX4
SK27	SK57
SK39	SK51
SK40	SK56
SK51	SK55
SX4	SX5
SX5	SK39
SX15	SX15・集石1
土器溜り1	F5グリッド土器集中区
土器溜り2	谷部土器集中区1
土器溜り3	谷部土器集中区2

た褐色土 (Hue10YR4/4) がII層の下位に部分的に認められ、弥生時代前期～中期後葉の遺物を含んでいた。III層以下が地山であり、基本的に同層上面で遺構検出を行った。ただ、遺構埋土が地山に近似した褐色土を主体とすることから、調査区南側の墓塚群など一部IV層上面を検出・確認面とした遺構もある。IV層はソフトローム層であるIII層とホーキ層ブロックの混成層であるが、遺構壁面に観察される堆積状況では不安定ながらもホーキ層が面的に遺存する箇所もあると推察される。V層はホワイトローム、VI層はハードロームで土層確認用トレンチによる所見はVI層まで記録した。浅い土坑などはIV層が底面となり、竈穴住居や貯蔵穴などはV・VI層まで掘削がおよび床面としている。VI層はおよそ1m弱堆積しており、トレンチと近接位置にあるSK33の底面を形成する軽石層(現地表下約2m)がDKPに相当するとみられる。

(高尾)

I層: 表土。腐葉土を主体とし、調査区全体に10～20cmの厚さで堆積する。

II層: 暗褐色土 (Hue10YR3/3)。やや粘質でしまりがある。調査地全体に広がっており、尾根部では10～20cmの厚さで堆積している。縄文時代～奈良時代の遺物を包含するが出土量は少なく、大部分を占めるのは弥生時代中期後葉のものである。黒曜石製の石鏃や剥片の出土も目立つ。

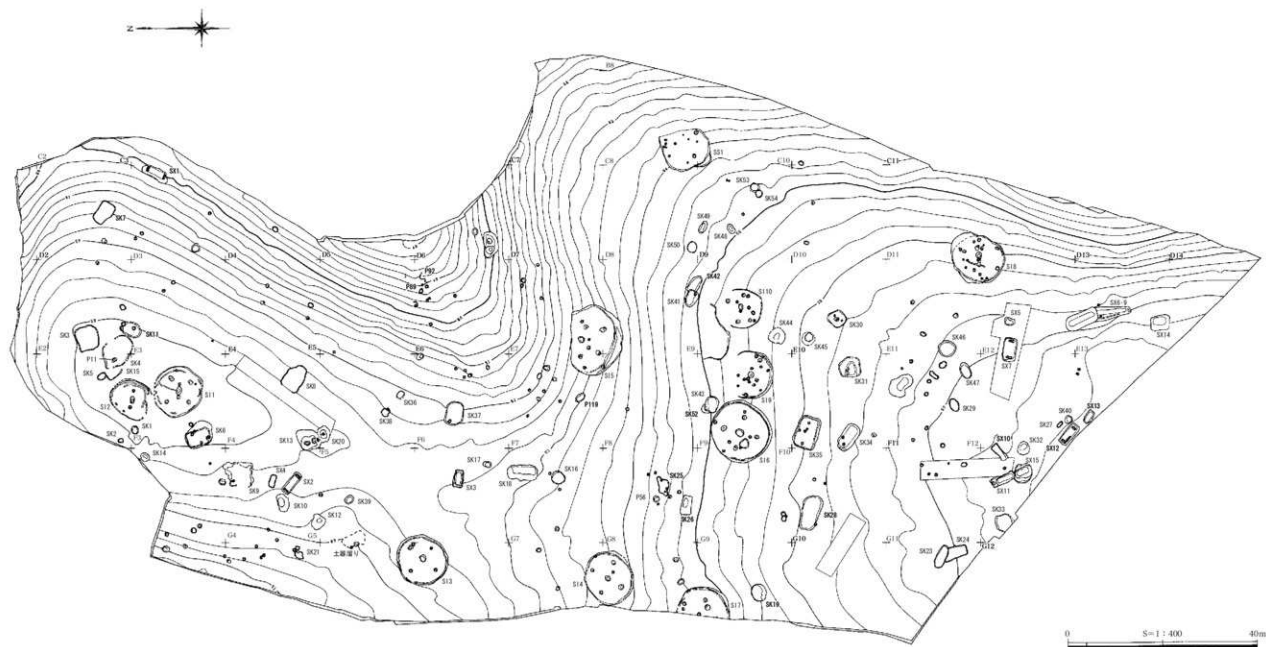
III層: 褐色土 (Hue7.5YR4/6)。微細な炭化物粒を少量含み、やや粘質だがしまりは弱い。厚さはおよそ20cm程度だが、尾根頂部などでは流失したためかIV層が露出している箇所もある。

IV層: 明褐色土 (Hue7.5YR5/6)。大山上部火山灰層に属するホーキ層に由来するとみられる明黄褐色土 (Hue10YR6/6～6/8) ブロックを多量に含む。しまりは弱い。

V層: にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/4)。粘性・しまりともにある。

VI層: 橙褐色土 (Hue5YR6/6～6/8)。粘性強く、よくしまる。

I層・II層とも尾根北側および南側頂部平坦面～斜面部で薄く、その間の緩斜面～鞍部でやや厚くなる。遺物包含層はII層のみであるが、地山までの堆積が比較的厚い尾根鞍部付近(F・G4～6グリッド)や緩斜面部(D～F10グリッド)では地山に近似し



第7図 遺構全体図

第2節 遺構の調査

(1) 概要

梅田萱峯遺跡1区では竪穴住居跡10棟、段状遺構2基、土坑54基、土坑墓・木棺墓15基、土器溜り3基、ビット134基を検出した(第7図)。

調査区北側は丘陵先端部にあたり痩せ尾根状を呈し、頂部の狭い平坦面付近に竪穴住居や貯蔵穴が集中するが、調査区南側は多くの竪穴住居跡や土坑が緩斜面部に沿って分布し、それらの空閑地となる尾根頂部平坦面に木棺墓・土坑墓が築造されるという配置が認められる。主要な遺構の多くは埋没の過程で廃棄土坑に利用されており、多量の遺物を出土した。その埋土は地山であるソフトローム(Ⅲ・Ⅳ層)の流入に由来する炭化物混じりの褐色土を基調とし、ほとんどが弥生時代中期後葉に帰属する遺構であった。古代までの遺物を含むⅡ層に由来する暗褐色土を埋土にもつような遺構は稀で少数のビット等に限定される一方、谷部を中心に分布する傾向がある。(高尾)

(2) 竪穴住居

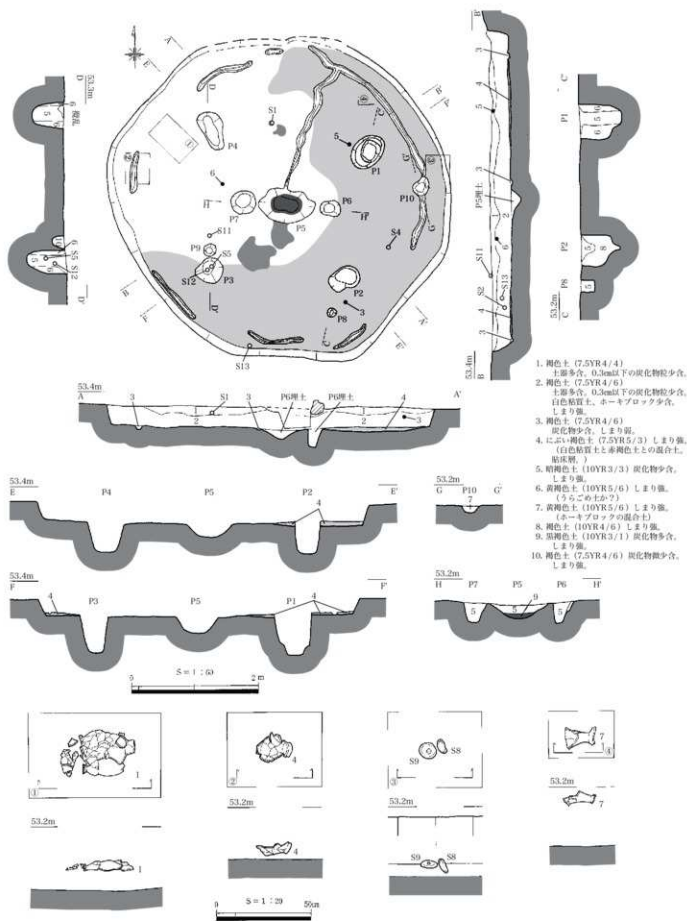
S11(第8～10図、表2、PL.2)

位置 E3グリッド、標高53.0mの丘陵先端部の平坦面に位置する。

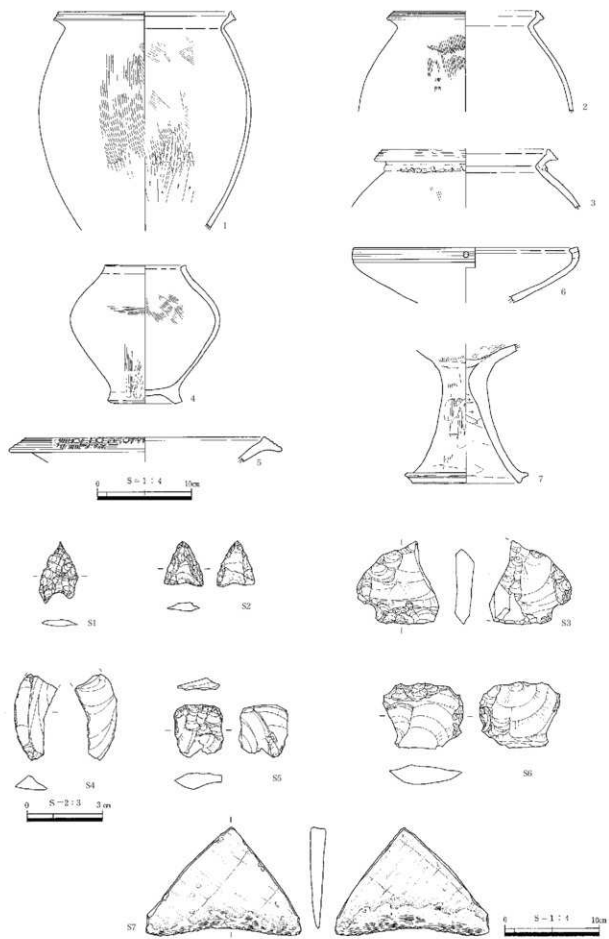
調査の経過 表土除去後、さらにⅡ層を除去したところで炭化物粒子と土器片を含む暗褐色土の不整円形プランを検出した。サブトレンチ(A-A'・B-B')により、壁面の立ち上がりと床面を確認したため、竪穴住居の可能性が高いと判断し、調査を行った。

規模と形態 平面形は直径約5mの円形で、やや六角形を呈する。床面積は約19.6㎡である。壁高は北東側で最も高く、32.5cmを測る。一方谷に面する南東側と南西側は共に約22cmとやや浅くなっている。竪穴はⅥ層を床面とするが、北～南西側の谷に面する側にはⅤ・Ⅵ層の混合土からなる貼床が施される。床面上には断面U字状の壁溝がめぐっている。部分的に途切れる部分があり、全周はしていない。この壁溝から中央ビットであるP5へとつながる床溝も一条確認した。ビットは9基確認した。P1～P4が主柱穴と考えられる。柱穴間距離はP1-P2間から順に2.0m、2.2m、2.2m、2.5mで、P4-P1間でやや広がっている。床面のほぼ中央に位置するP5は長軸89cm、短軸54cmを測り、楕円形を呈する。埋土は2層に分層でき、下層に炭化物層を検出した。この炭化物層の上層には土器片が認められたものの、炭化物層中においては遺物が認められず、埋土の混入も無い純粋な炭化物の層であると認められた。このことから、この炭化物層は竪穴が住居として機能していた時点で意図的にビット内に充填されたもので、P5と壁溝が床溝でつながっていることを踏まえると、防湿の効果を狙って炭化物を充填した可能性を指摘しておきたい。また、P5の両端にそれぞれP6、P7がある。これらのビットはP5の長軸と同一直線状に位置していることから、P5に伴う構造物の一部であることが考えられる。P5の周囲において5箇所焼土面が形成されていた。いずれも掘り方をもたず、床面が被熱し変色していた。P5の南側にある焼土面を断ち割ったところ床面から深さ2～3cmの深さにわたり、硬く焼きしまっていることが確認でき、長期にわたり利用されていたことが考えられる。

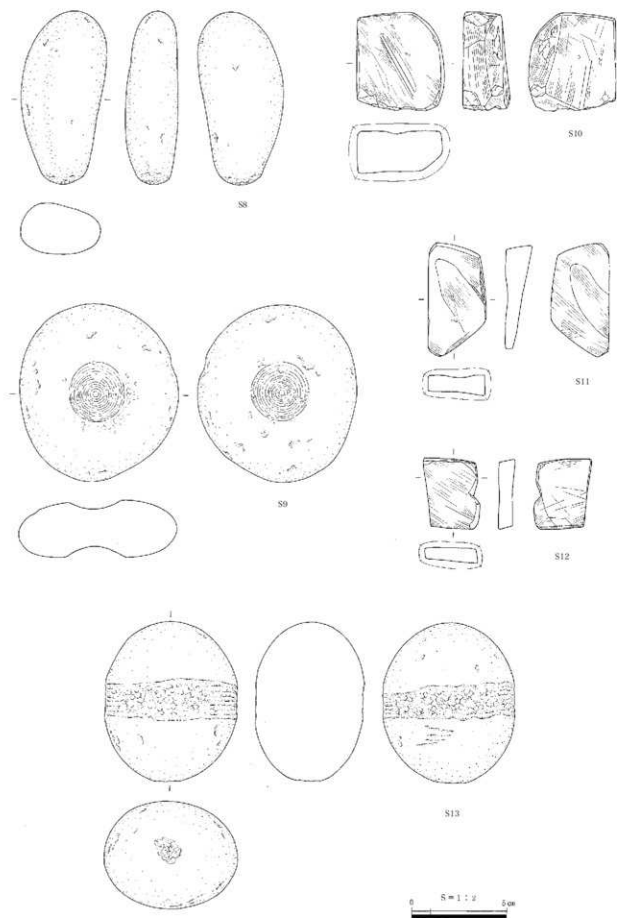
埋土と遺物の出土状況 後世の植林による攪乱を受けておらず、埋土の残存状況は良好である。Ⅱ層に覆われた下に褐色土(2層)が薄く弓なりに堆積し、その下に地山層であるⅣ層とⅤ層のブロックが混じる褐色土(3層)が堆積する。これは周堤が、廃絶後に流入し堆積したものと考えられる。2層



第8図 S11



第9図 S11出土遺物(1)



第10図 S11出土遺物(2)

には多量の土器片がふくまれるものの、完存しているものは少ない。この層からは高坏7が出土している。これらの土器は竪穴が廃絶され、3層が堆積し、窪地状になったところへ流入もしくは投棄されたものと考えられる。3層からも多くの土器・石器が出土している。凹石S9、磨石S8は壁面際の床面上に並べ置かれた状態で出土した。両者の使用痕を観察すると磨りの痕跡が顕著に見られ、蔽いて粉にするのではなく、磨り潰して粉にするという行為がなされたことが分かる。これらの石器は出土状況からセットで使用されていた可能性があり、石器の組み合わせと使用法を知る上で注目すべき出土状況であるといえる。

出土遺物 1～3は甕である。それぞれ口縁部に2～3条の凹線が施される。3は頸部に指頭圧痕貼付突帯が施される。4は無頭壺、5は壺の口縁部である。口唇部に4条の凹線を施した後刻目、円形浮文を施す。6は高坏である。S1、2は共に凹基式石鏃、S5は黒曜石製楔形石器、S7は石包丁である。S10～12は砥石であり、このうちS10は流紋岩質凝灰岩である。S13は石錘で、下端部に敲打痕が認められる。

時期 出土土器はIV-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉には廃絶されたものと推定される。(浅田)

表2 S11 ビット一覧表

P番号	長軸×短軸—深さ(cm)
P1	60×43—68
P2	49×37—61
P3	45×41—62
P4	63×36—50
P5	90×53—24
P6	33×25—32
P7	40×39—30
P8	15×13—23
P9	20×18—18
P10	30×24—9

S12 (第11・12図、PL.3・40)

位置 E2・3グリッド、標高53mの尾根頂部平坦面に位置する。南壁をわずかにS11に切られる。

調査の経過 III層上面で弥生土器・炭化物を含む約4.5m×4mの褐色土プランを検出し、サブトレンチ(B-B'ライン)底面に焼土面と壁溝を確認したため、竪穴住居と判断し調査を進めた。

規模と形態 平面形は長軸4.4m、短軸3.9mの不整楕円形を呈し、床面積は11.2㎡を測る。概ねVI層上面を床面とし、検出面からの壁高は南東部で最大28cmを測る。検出したビットは3基で、規模はP1(72×40—20)cm、P2(35×32—20)cm、P3(26×24—16)cmを測る。いずれも小さく浅いが、その配置からP2・3が主柱穴、P1が中央ビットと考えられる。柱穴間距離はP2-P3で1.7mである。床面東半部の壁沿いに幅10～20cm、深さ3～5cmの壁溝がめぐり、西半部で溝は壁体から離れ部分的にしか存在しない。壁溝の内側に幅10cm前後、深さ2～3cmの溝がもう1条めぐるが、土層断面からすれば建て替えによるものではないと考える。中央ビットP1を挟み南に90×80cm、北に0.7×0.5mを測る焼土面を検出した。南側の焼土面は南西部で明褐色、その周縁で暗赤褐色を呈し、北東部分に長さ54cm、幅10～16cmの炭層が検出された。北側の焼土面は表面の色調等からすれば南側のものより被熱の程度が弱かったと推測され、やはり24×14cmの範囲で炭層がのる。

埋土と遺物の出土状況 竪穴は壁際および床面上に2層が堆積し、全体を1層が覆う。焼土面に概ね合致する範囲には多量の炭化物と微量の焼土粒を含む3層が堆積している。P1では炭化物・焼土粒の混じる層と粘質土が互層となる。焼土面の状態などから、本住居跡が鍛冶遺構であると想定されたため、焼土面付近を被覆する土と焼土を採取して水洗選別を行ったが、鉄片や鍛造剥片等の鍛冶関連遺物は出土しなかった。よって、その性格までは言及できない。遺物はほぼ1層に伴って出土しており、床面直上遺物は台石S15のみである。

出土遺物 8は甕で口縁部に3条の凹線が施される。9は小型の壺で、手づくね成形後タキによって

仕上げており、溝状のタタキ痕を外面に残す。S14はサヌカイト製の石織、S15は台石である。

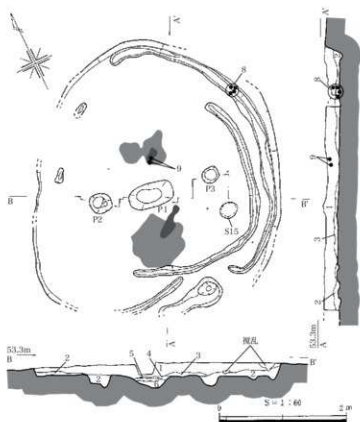
時期 出土土器より、本遺構の時期は弥生時代中期後葉（IV-1）と考える。

（高尾）

S13（第13～15図、巻頭図版2・3、文中写真3・4、表3・4、PL3・41・61）
位置 G5・6グリッド、尾根鞍部にあたる標高52.5mの平坦面に位置する。約4m北側に土器溜り1が近接する。

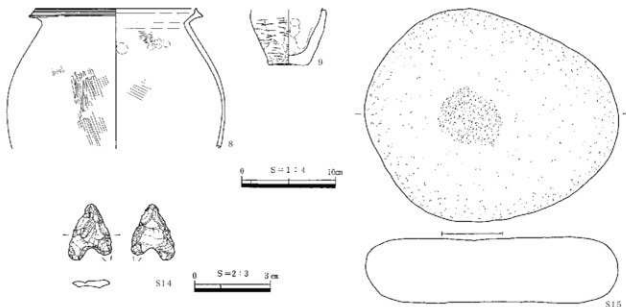
調査の経過 同グリッド精査中に径約6mの範囲で焼土粒を含む褐色土の広がりを出した。検出面で求心方向の炭化材を確認したほか、サブトレンチ（B-B'）でも炭化材や多量の焼土ブロックが出土したため焼失住居であると判断し、炭化材碎片や焼土にも注意を払い調査を進めた。

規模と形態 平面形は長軸5.6m、短軸5.2mを測る不整形円形を呈し、床面積は18.2㎡である。北側はIV層、南側はV層を床面とし、壁高は南東壁で最大41cmを測る。壁沿いに幅5～15cm、深さ5～10cmの壁溝がめぐるが、東側で1箇所、北西側コーナーで2箇所途切れて全周しない。また、北西コーナー床面に短く掘られた溝を基点として、竪穴のラ



- | | |
|--------------------|--------------------------|
| 1. 褐色土 (7.5YR4/4) | 0.5cm以下の炭化物粒少含、土器多含。 |
| 2. 明褐色土 (7.5YR4/6) | 0.2cm以下の炭化物粒微含、粘性強、しまり強。 |
| 3. 褐色土 (7.5YR4/4) | 0.3cm以下の炭化物粒多含、焼土粒微含。 |
| 4. 褐色土 (7.5YR4/6) | 0.3cm以下の焼土、炭化物少含。 |
| 5. 明褐色土 (7.5YR5/6) | しまり強、粘性強。（粘土質でブロック状の塊積。） |
| 6. 褐色土 (7.5YR4/6) | 0.5cm以下の炭化物、焼土粒少含。 |

第11図 S12



第12図 S12出土遺物

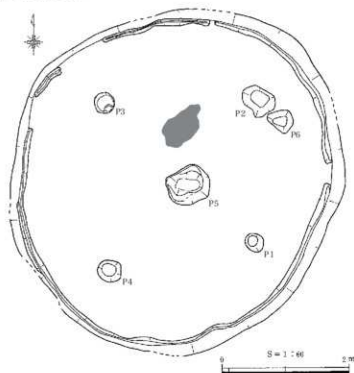
インはやや直線的に掘削されている。ピットは計6基検出し、このうちP1～P4が主柱穴と考えられる。規模はP1(34×28-36)cm、P2(56×44-25)cm、P3(33×31-29)cm、P4(39×36-20)cmで、柱間距離はP1-P2間から順に2.3m、2.4m、2.6m、2.3mとP3-P4間がやや広くなる。床面中央に位置するP5は長軸70cm、短軸57cm、深さ35cmを測る不整六角形を呈す。P6は長軸42cm、短軸28cm、深さ16cmで皿状を呈すピットである。P5の北側に80×50cmの不整形の焼土面があり、床面となるV層が赤色硬化していた。

埋土と遺物の出土状況 埋土中位から床面にかけて多量の炭化材と焼土ブロックを検出した。住居西側で1cm以下の碎片となった炭化材を多量に含む炭化物集中層(24～27層など)が顕著に認められ、東側は少ない。これに対し焼土ブロック集中層(16・17層)は住居北～東側に集中し、屋根に葺いた土が焼けたものと考えられるが、ブロックは3cm以下のものがほとんどで焼け方は弱かったことがわかる。これらの炭化物・焼土ブロック集中層を被覆する各層も炭化物や焼土粒を少量ずつ含むが、上層の1～3層には炭化物はわずかで地山ブロックも含む。住居焼失後の埋め戻し土や崩された周境土である可能性もある。P1～4では柱痕跡が確認でき、推定される柱径は15cm前後とみられる。

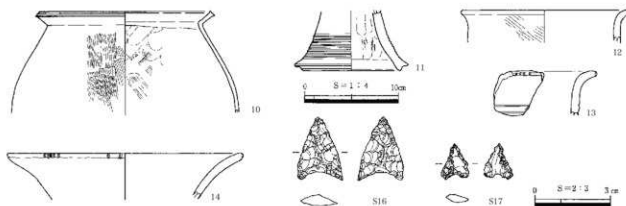
住居中央付近から南西部の床面上で遺存状態が良好な炭化材が出土した一方、中心部および南東部では炭化材はほとんどみられない。西側の材は屋根土によって酸欠状態となり、炭化した状態で崩落した結果よく残っている。逆に壁沿いの周縁部には炭化材・焼土ともに少ないが、燃焼度が低く生木にちかい状態で倒壊したため腐植して残らなかったと推測される。住居中心部に関しては煙出しがあり、その周囲までは屋根土がかからず茅が露出していたと想定されるため、部材は完全燃焼して残らなかったと考えられる⁽²⁾。南東コーナー付近は焼土・炭化材碎片ともにほとんど検出されなかったため、最も燃焼度が低かったと考える。形状が推定できる材では丸太状、半截丸太状を呈すものがほとんどで、板状のものはわずかしかない。炭化材1は25×7cm、炭化材3は58×12cmを測る半截丸太状の材で、厚さは7～8cmある。炭化材4や7は径10cm弱の丸太材で、7は残存長39cmを測る大型の材であった。これらに対し、炭化材65は大半が土壌化しており状態は悪いが、遺存部分からすれば長さ80cm、幅13cm、厚さ1～3cmを超える板状品であったと推測される。中央ピットP5内には焼失の過程で落下した炭化材が残っており、炭化材8は長さ30cm、径4cmの細い丸太材、炭化材9は長さ23cm、径9cmの丸太材であった。P5最下層には炭化材碎片を多量に含む層が堆積し

表3 S13ピット一覧表

P番号	長軸×短軸-深さ(cm)
P1	33×28-38
P2	57×44-25
P3	34×32-28
P4	38×37-23
P5	68×57-37
P6	42×36-17



第13図 S13(1)



第14図 S13出土遺物

ており、炭化材8・9はこの層の上ののっていた。個別に述べたもの以外は崩落の過程で小片と化しており、遺存状況も悪い。

これらの炭化材であるが、地形的に低くなる北側のどこかに入り口があったと仮定し棟通り（主軸）を南北方向とすれば、半截丸太材1～3などは垂木もしくは桁、板材5は母屋桁、5の下で直交する丸太材6は垂木の可能性がある。5と平行し、腐植により中空状となった半截丸太材も母屋桁であろうか。大型の丸太材7は遺存法量および出土位置から桁であるかもしれない。中央ピット内に落下している丸太材8・9は位置的に煙出しの部材と思われる。その他、小片と化した材の多くは丸太状で、繊維方向や出土状況からみて垂木であった可能性が高い。炭化材1～9については樹種同定を行っており（表26参照）、垂木等の半截丸太・丸太材はスダジイ、桁の可能性もあるような径の太い丸太材はニガキが使用されていたことが明らかになった。

出土遺物 いずれも埋土中からの出土で、焼失前に住居に残されたものではない。10は甕で幅狭の口縁に2条の凹線を施し、内外面ハケ調整を主体とする。11は高坏の脚部で外面に9条の沈線、脚裾に1条の凹線を施す。12～14は弥生時代前期の土器で混入品である。S16・17は黒曜石製の石鏃で、S17は未製品である。

時期 出土土器より、本遺構の時期は弥生時代中期後葉（IV-1）と考える。なお、炭化材3・7で¹⁴C年代測定を実施しており、それぞれ2460 ± 230、1630 ± 510という測定値が得られた。いずれも土器型式よりもやや古く幅のある測定値であった。

（高尾）

註）浅川滋男氏のご教示による。

S14（第16～19図、巻頭図版7、表5、PL.4・5）

位置 G7～8グリッド、標高53.5～54.0mのわずかに北に向かって傾斜する緩斜面に位置する。

調査の経過 表土除去後、さらにII層を除去したところで炭化物粒子と土器片を多く含む暗褐色土の円形プランを検出した。サブトレンチ（A-A'・B-B'）により、焼土面とピットが確認でき、堅穴住居と判断し調査を行った。

規模と形態 平面形は長軸5.6m、短軸5.0mのやや楕円形を呈する。床面積は約19.6㎡である。壁高は南側で最も高く、51cmを測る。一方北側は19cmと地形に沿うように浅くなっている。堅穴はVI層を床面とする。

床面において壁溝、ピット7基、焼土面を1箇所確認した。壁溝は全周せず、地形的に高位になる



第15図 S13(2)



表 4 S13 樹種同定結果

炭化材番号	和名	種別	取上No.	炭化材番号	和名	種別	取上No.
1	スダジイ	半截丸太	炭1	6	スダジイ	丸太	炭66
2	スダジイ	板	炭5	7	ニガキ	丸太	炭124
3	クスノキ科	半截丸太	炭22	8	ツバキ属	丸太	炭138
4	ニガキ	丸太	炭33	9	ニガキ	丸太	炭145
5	スダジイ	板状	炭65				

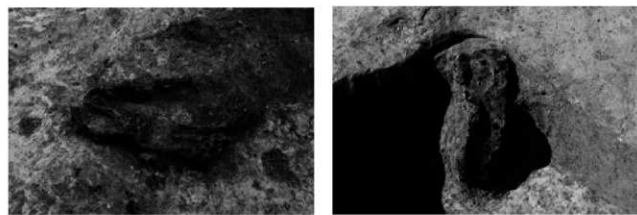


写真3 S13炭化材出土状況(西から)

写真4 S13-P5炭化材出土状況(東から)